



魔女達の ティー☆タイム

文：みさと あきら

トリック・オア・トリート

「トリック・オア・トリート！」

僕らはドアの前で叫ぶ。

黒いマントを羽織り、手にはジャック・オ・ランタンをかたどったかご。中にはもらったお菓子。

「トリック・オア・トリート！！」

どうしたんだろう。この家からは反応が無い。

「どうする？」

「この家、やめとく？」

急にひそひそ声になる僕ら。作戦会議。

「トリック・オア・トリートって言うからには何かいたずらしなきゃいけないかな？」

「いたずらって言ってもなあ。何か考えてる？」

「いや、みんなくれるから考えなかった」

結局誰もこんなことがあるなんて考えもしなかったみたい。

結論。

あと1回だけ叫んでみて、反応が無ければ次の家に行くことになった。

みんなで声をそろえて叫ぶ。

「トリック・オア・トリート！！！」

ギーとドアが開いた。

中から出てきたのは痩せっぽちのおばあさん。

黒い服、黒い帽子、手にはなぜかほうきを持っている。

ま、まさか本物の魔女？おばけ？

おばあさんが口を開く。

「坊やたちごめんねえ。アタシ、耳が遠くてね」

耳が遠いと聞いて、僕らはほっとした。

「はいはい、お菓子をあげようね。ちょっと待っててごらん」

おばあさんは家の中に入ってしまった。

すると。

ポンッと軽い音がした。

なんと。

その家は、お菓子の家になってしまった。

僕たちはクッキーの壁やチョコレートのドアを見つめて、呆然としてしまったのです。

魔女の箱

「あのな、マリー。あんまり魔術を使うなよ。近所の人に魔女だってばれたらどうすんだよ」

僕の忠告に妻のマリーは「てへっ」と舌を出した。ちゃんと解ってくれてるのかなあ。

マリーは正真正銘本物の魔女だ。ある国で出会い恋に落ちた僕らは、国境も言葉も種族の壁さえ越えて、めでたく国際結婚のはこびとなった。新婚ほやほやだ。

昼間、僕は会社で仕事をこなし、彼女は家で家事をこなす。

家事をするとき、彼女はためらいもなく魔術を使う。家の掃除、炊事に洗濯。庭には魔術に使う薬草が植えてある。たくさん。

ご近所さんとのトラブルを避けたい僕は彼女を戒めたのだ。それなのにマリーは聞いてるんだかどうなんだか。やれやれ。

翌朝。

出掛けに弁当箱のようなものを持たされた。マリーからうつむきがちに押しつけられたんだ。「開けないでね……」蚊の鳴くような声で彼女は言った。

なんだろう？

なんだろう、この弁当箱。

開けるなって？

そう言われると開けたくなってしまうのが人間だ。パンドラも浦島太郎も。そして不幸になってしまうのが人間だ。

昼休み。

人気のない公園で恐る恐る弁当箱を開けた。そっと。

不恰好なタコさんウインナー、崩れた卵焼き、いまいち色付きの悪い唐揚げ。ご飯には、まだ不自由な日本語で「きおつけます」と海苔が置いてある。

そっか、あいつ。

家事は苦手なんだなあ。やっぱ可愛いなあ。

今年も会えた

「トリック・オア・トリート！」

今年もあの子が現れた。今年のコスプレはなんだろう。

ドアを開けると、魔女の帽子に黒マントの少女。おかつぱ頭に、背丈は今年も変わらない。

「いやいや、トリックはやめてね」

笑顔でチョコレートのお菓子を渡す。リンツの上等なやつ。もちろんこの日のために用意していたものだ。小さな手には少し大きすぎたかもしれない。

この小さな古い家には一人で住んでいる。過疎の進んだ田舎町。かつては炭鉱があったのだが。

お菓子を抱えてはにかむ顔が愛らしい。

越してきてから、ラッキー続きだ。町の片隅にあるお寺さん（大家さんでもある）から「ああ、あの家は座敷童子が居るからね」と冗談めかして言われたときはそんなバカな、と思っていたのだけど。

「えへへ」

極上の笑顔を見せてくれた子は、すうっと景色に溶けて、消えた。

闇と闇鍋の神隠し

夜更け。静かな住宅街に犬が吠える。それはもう大きな声で。

「うるさいよ！ 狗肉鍋にして喰ってしまうぞ！」

犬の鳴き声は聞こえなくなりました。

朝。早いうちから高らかにニワトリの声。周りのみんなを起こしてしまう。

「卵も産まないのに鳴くんじゃないよ！ 唐揚げにしちまうよ！」

ニワトリの声も聞こえなくなりました。

晩飯時。飼っている豚がふごふごと出来上がった料理を食べていきます。

「分別無く何でも食べるんじゃないよ！ 酢豚になりたいかえ？」

食物が減る速度が遅くなったといいます。

今日も魔法の二世帯住宅には、子供たちが訪ねてきます。

好奇心に負けた子供たちは、魔法によって姿を変えられてしまいます。

あるものは電球に。

あるものはストーブの薪に。

またあるものは……。

魔法の家を訪ねた子供たちに帰ってきたものはおりません。

勝負ごっこ

「はい、上がり。僕の勝ち」

「そっかあ、また負けちゃったなあ。じゃあ賞品のドーナツ召し上がれ」

自分のことを僕と言った少年は得意気に、もう7個目のドーナツに歯を立てる。少年は自分がこのゲームに強いと信じている。世間知らず。目の前の、ドーナツを作った人物である魔女の方がずっとこのゲームに詳しく、実のところ強い。ああ、少年は彼女が魔女であることに気付いていない。魔女は少年に甘いカフェオレも渡す。ついでに自分用にほろ苦い食前酒を作る。

「今度は負けないわ、もう1勝負お相手願える？」

「いくらでも受けてあげるよ」

魔女は、腹ペコ。

期限切れの言葉

99年前の「カエルになっておしまい」。

森の奥の沼。カエルにされていた王子様は、ご自分の爪のついた5本の指を目にして驚きました。記憶している限り、初めてご覧になるものだったからです。

北の魔女は、王子様のお母上であるとても美しいお后様に嫉妬しておりました。生まれたばかりの王子様に呪いをかけて連れ去ってしまったのです。だから王子様は人間だっただご自身をご存知ありません。

しかし99年の月日を経た王子様はお歳を召してしまっておりました。沼の水面に浮かぶお姿をどのようにお感じになられたのか。頭頂は禿げ上がり、白い髪の毛が僅かに、けれど長く垂れ下がっています。皮膚も弾力無く、お顔も手も皺とシミだらけです。もちろん衣服など身に着けておりません。そして身体そのものも弱っておりました。細く痩せこけた足腰では立つこともできません。お腹が空いても、虫以外に何を食べたらよいのかわからず、その虫さえも、カエルの舌がございませぬので捕ることができません。

力なく水面を見つめていらっしやると、風が歌ってくれました。

風の教えに、王子様はとさりと身を横たえられ、そっと瞳をお閉じになったのでした。

人喰い魔女の家

パウダーシュガーをふって出来上がり。

うっすらと雪をかぶったお菓子の家です。

レンガはチョコレート。

ドアはビスケット。

しっくいにはアイシングを使いました。

窓にはガラスの代わりに薄いべっこう飴。ちゃんと向こうが見えます。

我ながらよくできた、と思いました。

最後の仕上げに、住めるくらいの大きさになるよう巨大化の魔法をかけます。

うふふ。

あとはこの森に迷い込んだ子供がこれに気付くのを待つだけ。

子供の肉は柔らかくて美味しいからね。

さてと。

お菓子の家に入り、ロッキングチェアに座って暖炉の火に当たってしまおうか。

ぱちぱちと音を立てて薪が燃えます。

つい、うとうととしてしまったんです。

まさかチョコレートが溶けてお菓子の家に押しつぶされるなんて思いもしなかった。